24×2

佐伯チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２４×２

【Ｎコード】
Ｎ５８５４Ｊ

【作者名】
佐伯チカ

【あらすじ】
「僕」の青春が輝いた瞬間と失う瞬間。
いつまでも輝きを忘れる事ができない「僕」は
気がつくとすでにただの一中年男性になっていた。
それでも過去を引きずる「僕」の見た未来とは・・・

終焉

お願いします　僕の時間を返して下さい

お願いします　僕の夢を返して下さい

お願いします　僕の　大切な人を　返して下さい

「ねぇっ！純愛って信じる？」

彼女は無邪気に笑いながら、僕のコートの裾をちょこんと掴みそう言った。

「さぁ・・・」

僕は反射的にそう言い返していた。

「サイテー！！」

ほっぺたをぷっと膨らまし、彼女はそっぽを向いた。

若い子は無邪気で良い。

いや、無邪気であることが無垢たる所以であり、本当の母性の証なのかも知れない。

「そうむくれるなって！」

あやすようにそう言うと、彼女は少しはにかんで言った。

「嘘だよっ！」

愛くるしい。

この場で彼女を抱きしめて、そのまま絞め殺してしまいたくなる。

そう、利己的でない母性を持ついまのうちに・・・
僕は狂っている。客観的にみてそう思う。
自分でも不思議な感覚。
愛おしくて愛おしくてたまらない。一方でその愛おしさを破壊したくなるような衝動。

「苦しいってば！！」
「離して！お願い！」

彼女の声が遠ざかっていく・・・
あの時の僕のように・・・

目の前には、マリオネットのように意のままに動く彼女がいた。
『そうさ。君は救われたんだよ。あらゆる利己的なものから』

『僕は間違ってなんかいない。全てを狂わせたのは・・・あの時の・・・』

屈曲（前書き）

生い立ちの１ページ目がめくられる

屈曲

誰も僕を愛してはくれない
代償を求めない愛などないのだから
母親でさえ

「せんぱ～い！」

僕は、地方でトップクラスの進学校の3年生だ。
振り返ると、同じ部活の後輩がいた。
彼女の名は『千鶴』。高校1年生だ。
部活と言っても、名ばかりの「歴史研究部」。
実態は、放課後にみんなのたまり場になる部室が欲しい連中の集まりだ。
「今日は、部活でないんですか？」
憮然として校門の前に立ちはだかる。
当然だろう。
僕は彼女と付き合っている。

「ああ、今日はちょっとな」
言い訳だ。実は別の女子校の理恵と約束があるのだ。

「つまんないな～　私も帰ろうかな～」
彼女は可愛い。文句の付け所がないほどの良い子だ。
でも、僕は贅沢なのかも知れないが、埋め尽くせない何かを感じていた。

「じゃあ、明日な！」

「うん。バイバイ！」

自転車にまたがり、理恵の家に向かう。
何を期待している訳ではなかった。
ただ、何かをしていなければ、苦しかった。

家の前には理恵が制服のまま、待っていた。
「今日ね、両親いないの！夜まで！ふふっ」
意味深な言葉をはいて彼女は僕を部屋へ案内してくれた。
「何か飲む？」

「じゃあ、コーヒー」
僕はポケットからタバコを取り出し火をつけた。
『ふ～・・・うめえや』

ほどなく彼女がコーヒーを抱えて部屋に戻ってきた。
「あ～！また吸ってる！！」

「いいだろ！窓も開けたからさ」

「もうっ・・・」

それから彼女の高校の友人の話とか、誰と誰がエッチした、とか。
どうでもいい話を聞かされうんざりしていた。
しばらく黙っていた僕に彼女が言った。

「ねえ、私たちもエッチしようよ！」

唐突だ。何を考えているやら。僕は呆れていた。
すると彼女は制服を脱ぎだし、下着だけの姿になった。
僕は彼女に押し倒されるようにベッドに横たわった。

・・・・・・・・・・・・・・

僕はまた、タバコを取り出すと火をつけた。
「ねえ。どうだった？」
彼女は照れくさそうに聞いてきた。
「初めてだったの？」
僕は聞き返した。
「うん。でもね、とってもね、嬉しかった」

『そんなもんなのか』
僕は服を着ながら思った。
『セックスってなんなんだ！！！』

・・・・・・・・・・・・・・

「おはよう！」
朝から千鶴は元気がいい。
「今日は部活でるよね？」

「ああ、行くよ」

また一日が始まった。くそみたいな一日が。

・・・・・数週間後・・・・・・

理恵から伝えられた。

『妊娠した』と。
正直に言うと、僕はわくわくしていた。
『少しは面白くなりそうだ・・・』

翌日、理恵と喫茶店で待ち合わせをした。
始終うつむいていた彼女が、震える声で言った。
「堕ろしたいの。だから病院へ連れて行って」
意外というべきか、妥当な判断というべきか。
「わかったよ」

世の中、甘くはない。すぐに両親のもバレてしまい、学校にもこの噂は広がった。

学校に呼び出され、停学処分を通告された。
『当然だな』
自宅へ帰ろうとしたとき、千鶴が声をかけてきた。

「ねえ、嘘だよね　嘘って言って！」

僕は無言で自転車にまたがった。
彼女は純粋な女の子だ。
これ以上、僕のような男と関わってもしょうがないだろう・・・

・・・・・3月・・・・・・・・・

こんな僕でも大学受験だけは成功した。
まがりなりにも田舎ではトップクラスの進学校だけに、落ちこぼれでもなんとかなるだけの勉強はした。

僕は、この場所から逃げるように東京の大学へ進学したんだ。

修復（前書き）

唯一の夢のような時間

修復

ほんの一時の夢だったのか
ほんの一時の現実だったのか
今となってはどうでもいい

理工系に進学した僕は、毎日レポートに追われていた。
遊ぶ時間など、ほとんど無かった。
それでも、自分が好きな授業を受けられることに充実感を覚えていた。
物理学は人間の感情とは無縁だ。
必ず、正解が存在する。
だからこそ、『正解』を求めてレポートを書き続けた。
そう思い込んでいただけなのかもしれないが。

「おい！たまにはセッションでもしないか？」
1学年で知り合った音楽仲間の簑島だ。
僕も彼も、当時のパンクムーブメントに傾倒していた。
僕はベースを、彼はギターをやっていた。
「ああ、いいな」
僕らの共通点は、単にパンクムーブメントに興味があるのではなく、
日本社会のあり方に疑問を
持っていた事だ。
彼は学生寮に住んでいたため、夜中でも騒音で苦情がくることはなかった。

「やっぱり、セックス・ピストルズのような単純メッセージには無理があるな」
「誰も深く考えちゃいないよ」
「モラトリアムって事か」
ベースのうねるような音と掻きむしるようなギターの狭間に、そんな論争を繰り広げていた。

学生生協とは、本来学生自身が運営する組織であるはずなのだ。
専門の職員を雇い、運営を任せている。
僕らは、生協活動を通して学生の自立と社会組織に関する理論を学ぼうとしていた。
諦めていた感情が、ここぞとばかりに吹き出してくるのが自分でも分かった。
本当の『正解』は己の中に存在する。
そう信じたくなかった。
ごまかそうと、物理学に没頭していたのだ。

僕らはあらゆる行動を起こし、あらゆる活動に意欲的に参加した。
演劇会の異色、黒色テントが主催する赤いテントに参加したり。
原発に反対する抗議デモに参加したり。

僕の心は満たされていた。いや、そう思い込めた。
生まれて初めて、『生きている』実感に浸れていた。
でも、まだ足りない事に気づいていなかったんだ。
一番大切なものが欠落していることに。

3学年の4月
高校時代の部活の後輩から、電話があった。
『千鶴』も東京の短大に合格し上京したとのことだった。
高校を卒業して以来、いくつかの恋人らしき人たちはいた。

でも、セックスは一切しなかったし、そんな興味も無くなっていた。
生きている実感を探すことで、精一杯だった。
電話の向こうで後輩がしゃべり続けていた。
「でね、千鶴が明日、ハチ公前で待っているからって伝えてって・・・」
正直、怖かった。
未だに高校時代を知る人間との接触が。
それに、千鶴は本当に良い子だった。僕みたいな男には・・・
負い目を感じていた。

次の日
僕は意を決して、ハチ公前に向かった。
駅前交番のあたりからも、すぐに彼女は見つけられた。

「久しぶり・・・」
精一杯の言葉だった。
「うん」
彼女は囁くような声でそう言うと頷いた。

僕らは、公園通りをゆっくりと歩きながら話した。

しゃべり出したのは彼女の方だった。
「私ね、考えてたの。ずーっとずーっと先輩の事」
「でね、先輩を信じたいって思ったの」
僕は無言で聞いていた。
彼女は続けた。
「理恵さんは、先輩がこっちにきてから、地元でずーっと先輩の悪口をいいふらしてたよ」
「確かに先輩と理恵さんはうまくいかなかったんだなって」
「でもね、私と理恵さんは違うの」

「だから、もう一度先輩と向かい合ってみたいの」

ルノアールの角で、僕は泣いていた。
次から次へとわき出る涙を止める事ができなかった。
立っているのも辛くなり、両手を道路について、泣き続けた。
『欠落している何か』
ようやく分かった気がした。

相変わらず、生協活動は行い、簑島との音楽活動も行い、物理学にも必死だった。
変わったのは、週末に必ず千鶴とデートすることが加わったことだ。

デートを重ねるたびに、僕は千鶴に惹かれていった。
お互いのアパートを行き来し、時には遠くまで旅行に行ったりもした。
でも、僕は手を繋ぐ以上のことはできなかった。
したくなかったのかも知れない。
全てが壊れてしまいそうで・・・

そう、それは僕の21回目の誕生日の日の事だった。
千鶴は僕のアパートにバースデーケーキを持って来てくれた。
2人だけの誕生会。
僕には十分すぎるほどの誕生日だった。
「お誕生日、おめでとう」
千鶴はそう言うと、大きな袋を僕に差し出した。
「え？」
無粋な言葉だったかな？
すぐに千鶴は言った。
「早く、開けてみて！」

手編みのマフラーだ！しかもかなり長い！
「こうやって～、こうして・・・」
千鶴は2人の首にマフラーを巻き付けた。
顔が近づく。
僕たちは、お互いの顔を寄せ合い、初めてのキスをした。

目を開けるとはにかんだ千鶴の顔があった。
僕は、沈黙に耐えきれず言った。
「ありがとう。めちゃくちゃ嬉しいよ」

それから体の関係を持つまでには、時間はかからなかった。
僕の恐れとは裏腹に、2人の関係は安定していた。
互いを必要としていることが、互いに伝わっていたからだ。

幸せな時間は2年続いた。
互いに、卒業と就職という現実に直面するまで。
僕は自分のエンジニアとしての夢をかなえるため東京に残る事を決め、
彼女は田舎に戻る事を決めた。
今思えば、この決断が僕の人生最大の過ちだったんだ。
いや、2年間の幸せが、思い違いの夢であったのかも知れない。
この時から、僕は変わってしまった。
なにもかもが。

崩壊（前書き）

２４才のある日、迎えた地獄

崩壊

すべては終わった
何もかも
もう僕には何もないんだ

もともと心から『愛』などというものの存在は信じていなかった。
そう、小学生の頃に親子の愛に関しての討論会があった。参観日にだ。
多くの友達が、ありきたりの親への愛情に感謝を述べる中、
僕は全く逆の意見を言った。
僕には年の離れた兄がいて、僕はその予備部品でしかないのだと。
そして全くの平等な愛など存在しないと。どちらかに比重は傾くものだ。
後ろの母親たちは、大きな声で笑っていた。
僕には、心理を突かれた事へのごまかしの笑いにしか聞こえなかった。

それが、証明される日がやってくる事になるとまでは想像できなかったが。

僕は希望通り、エンジニアとして自分の設計したものを世に出したいという夢の
第一歩を踏み出した。
入社1年目などでは、大学の復習のような仕事や、雑用ばかりだっ

た。
それでも、先輩は合間を見ては、設計の手順やこつなどを丹念に教えてくれた。
充実していた。
千鶴とは、手紙でのやりとりが主で、電話はなかなかかける事が出来なかった。
毎日残業が続き、帰りは終電か、その一本前の日々が続いた。
それでも、僕は信じていた。千鶴が待っていてくれる事を。
入社2年目にして初めて、新規設計の課題を与えられた。
同僚の中では一番だった。
無我夢中で図面に向かっていた。
先輩にアドバイスをもらいながら、懸命に仕事をした。
生きている証が欲しかったのかもしれない。
僕という1人の人間が、確かに、そこに、存在していたという。
半年が過ぎ、ようやく試作品が完成した。
当時、会社の量産工場は本庄市にあり、量産のための段取りに幾度となく通った。
そうして、念願かなった僕の『証』が家電店に並んだ。
営業部の課長が、お祝いだといって自腹を切って自社製品をわざわざ買ってきて、
僕にプレゼントしてくれた。
僕は、心から生きていることの素晴らしさに酔った。
すぐ先に、断崖があることも知らずに。
それからは、幾つもの担当を任されるようになり、さらなる多忙を極めていた。

そんな、ある日に、終わりがやってきた。
２４才の１０月２４日の夜の出来事だ。
相変わらず、終電近くの電車でアパートに着くと、ポストに千鶴から
の手紙が
入っていた。
嬉しくて、嬉しくて、部屋へ入るなり、玄関先で封を切り読み始め
た。

「ごめんなさい。好きな人が出来てしまいました。今まで本当にあ
りがとう」

目の前が真っ暗になった。いや、比喩ではない。
現実に、前が見えなくなり、鼓動が急に激しく、息が思うように出
来ない。
そのうち、頭の後ろのほうから、真っ暗な闇へ引きずり込まれるよ
うな恐怖。
ただ事ではないと認識した僕は１１９番通報するのが精一杯だった。

目が覚めても、誰もいなかった。
夜勤当直の先生が一人。
「ああ、気がつきましたか？」
僕は・・・
「一応、簡単な検査はしましたが、特に異常はないようですから、
お引き取り下さい」

でも、僕は頭の中が痺れている感覚のままで、意識もはっきりとしていない事の自覚はあった。
朦朧としながら、ベッドから降りると、タクシーを呼んでもらいアパートまで帰った。
アパートに着いても、その症状は変わらず、眠ると死んでしまうのではないか？という
恐怖から、眠る事さえ出来なくなっていた。

明くる日、会社は体調不良ということで休んだ。
だが、事態は予想以上に深刻だった。
昨日の『頭の後ろのほうから、真っ暗な闇へ引きずり込まれる感覚』は何度となく起きた。
手足は震え、まっすぐ歩くことさえ出来なくなっていた。
病名もない状態で、会社に報告すら出来ず、結果的には辞職するしか無くなってしまった。

一人の恐怖から、実家に帰ることを決意し、母に連絡した。
母は、全く心配もせず、僕の病気は言い訳で単に東京から逃げてきたのだと思ったらしい。
仕事も持っていた母は、僕が実家に帰る事を拒み、こう言った。
「静岡におばさんが一人でいるから、そこに行って面倒を見てもらいなさい」

兄が東京から会社に馴染めず、実家に帰ってきたのを喜んで迎え、父の会社の関連会社に
就職出来るよう、世話をしたことは知っていた。
弟の僕の場合は、そうはいかなかったようだ。
小学生の時の思いがよみがえった時だった。

信じてもらえない。こんなに苦しいのに。
誰にも理解してもらえない。こんなに心細いのに。

・・・・・・・・・・・・・・

それから5年後。
名古屋に良い先生がいるとのことで、紹介を受け、診察に行った。
5年間！5年間苦しんだ！5年間かけてようやく病名が分かった。

『パニック障害』

先生の説明によると、脳の分泌物の一種が極端に減ることからくるのが原因であるらしい。
事実、処方してもらった薬を飲み始めて2週間ほどで、今までの症状が嘘のように消えた。

ただし、完治する例はまれで、一生薬は飲み続けなければならないらしい。

『親子の愛』？『彼女の愛』？・・・・

僕は諦めにも似た怒りを覚えていた。
第一級障害者に認定され、それでも、見た目には何も普通の人と変わらない。
人は他人の過去など、お構いなしだ。
言いたいことを言っては、自分の負荷を軽くしようとする。

生まれてきたときに既に背負ってきた業を増やすがごとく・・・

それからの僕は『愛』などというものには興味が無くなった。

回帰（前書き）

無になった僕は空虚な時間を費やすだけだった

回帰

生きるって

生まれた事ですか？

死ぬ事ですか？

毎日毎日、薬は欠かさずに飲んだ。
一日でも飲まない日があると、決まって「例の症状」が僕を襲った。
ギリギリの崖を歩いているような、感覚だった。
何に望みがあるわけでもなく、何に楽しみがあるわけでもない。
「生」を維持するのが精一杯だった。

それでも、何故だろう？働かずにはいられなかった。
まだ、希望を持っていたのか？義務感からか？
もし、義務感からならまだ人間として、生きようとしていたのかも知れなかった。
当時の僕には、そんな判断もつかなくなっていた。

夢を失った僕にとって、仕事は何でも良かった。
給料が良くて、休みがきちんと取れるならば。
当時は、半導体産業の最盛期であった。
たまたま、お世話になっていた叔母の近くに半導体の製造機を作る会社があった。

その求人を見て、応募した。
まだ若いこともあり、採用に問題はなかった。
仕事は、東京でやっていた事に比べれば、遙かに簡単で必死になって勉強しなければ、
ならないほどではなかった。
それが、さらに僕を人形のようにしていった。
笑うこともなく、泣くこともない。
そんな日々の繰り返しだった。

会社には若い事務の女の子がいたが、僕には全く興味がなくなっていた。
同じくらいの仲間が、あの子がかわいいとか、あの子は性格が悪いとか・・・
休憩時間になると、決まってそんな会話が聞こえてきた。
「なあ、どう思うよ?」
そんな問いかけにも、
「そうですね」
としか返事が出来なくなっていた。
どうせ、恋愛だろうが、仕事だろうが、自己の利益しか考えていないのだから。
『どれだけ、業を増やせば気が済むんだ!?』
心の中で、つぶやいていた。

会社では、与えられた仕事を確実にこなしたからか?開発部への異動命令が下った。
これがきっかけで、自分より年が若干多く、開発に移動したくてもさせてもらえない先輩からの
やっかみが始まることになった。
先輩は日々、上司や組織への悪口を僕に言い、洗脳しようと必死だ

った。
底の浅さが見えて、滑稽でもあった。
しかし、僕がその動きに乗せられないと分かると、強硬手段を執ったのだった。
いわゆる、『告げ口』というやつだ。
いわれもない事で、上司に呼び出された僕は、結局、
「辞表」を提出させられるはめにまで追い込まれた。

『ほらね』

僕の心がつぶやいた。
これが、人間なんだよ。人間を司るＤＮＡは利己的に出来ているのかも知れない。

僕にはエンジニアとしての経験がある。だから就職には困ることはない。
そういう思いもあった。
思惑通り、すぐに就職先は見つかった。
そこも、同じようなＤＮＡの集まりだと諦めつつも、働いた。

気がつくと、３０才を過ぎてしまっていた。
未だ、結婚していない高校時代の同級生から、連絡がかかるようになりはじめたのは、
この頃からだった。
女性は、３０才を過ぎると結婚というものに、焦りを感じるらしい。
僕には、全く理解出来ないことであったが、何人かの同級生に『求められた』のは事実だった。
僕は、全てを断り、一人を選んだ。
当然の選択だった。

しかし、そんな時、以前勤めていた会社の女の子から電話があった。
それが、紀子だった。
１０才も年下の彼女は、僕にこう言った。
「あなたのことを、慕っています」
慣れない表現にびっくりした。と同時に２４才の頃の自分がふっと蘇る感覚に襲われた。
いや、僕は内心、ずっとあの日の前に戻りたかったのかもしれなかったんだ。

それから、もう二度としないと思っていた『恋』をした。
正確には、したと思い込んでいた。

僕は２４才に戻るべく、彼女との結婚を決意した。

また、さらなる失意が待ち構えているとも知らずに。

絶望

絶望には終わりがありますか？
涙には終わりがありますか？
教えて下さい・・・

結婚とは人生の墓場である

そんな陳腐な言葉も笑えてしまうほどの地獄だった。

新婚当日から、それは始まった。
朝、目が覚めると、隣に紀子が寝ていた。

「朝だよ！」
そう言葉をかけても起きようとしない。
『まあ、疲れているんだろう』
僕は、気にも止めず会社へと向かった。

会社は新婚であることに気を遣ってくれ、定時であがらせてくれた。
そう言う意味では新婚も悪くない。
少しだけ得をしたような気分だった。
当時住んでいた家までは、車で１０分くらいの場所だった。
家とは言っても、２ＬＤＫのごく普通のアパートだ。
１階の隅の部屋なので、外からは丸見えだ。
車を降りて、玄関のチャイムを鳴らす。
昔ドラマでよく見た光景だ。

ドラマでは、新妻がエプロンをして出迎え、頬にキスをする。
そんな下らぬ妄想を思いながら、紀子が出てくるのを僕は待った。
しばらく待っても返事がない。
まあ、ドラマのようには行かないのが現実だ。
諦めて鍵を開け、中に入ると部屋中真っ暗だった。
『何かあったのか！？』
僕は、急いで寝室へ向かった。
そこには寝ている紀子の姿があった。
「おい！どうしたの？」

「う～ん・・・」
紀子は目を擦りながら、僕の方を見た。

「具合でも悪いの？」
僕が訪ねると紀子は不機嫌そうに言った。
「ただ、寝ていただけよ！」
「もう帰ってきたの？」

僕は呆れて言った。
「もう6時だぜ。夕飯は？」

相変わらず憮然とした態度で紀子は言った。
「コンビニでお弁当でも買ってきてよ！」

驚いた。
いや、瞬間的に頭に血がのぼり、口論となった。

『まったく、いきなりこれか！』
僕は呆れて、そのまま寝ることにした。

その時は、たまたま機嫌が悪かったのかと思い過ごしたが、
『たまたま』ではなかった。
それから、僕は毎日コンビニの弁当を食べ、
休みの日は、3食ともコンビニ弁当だった。

何もしない。何も出来ない。
世の中にこんな女の子がいるとは思ってもいなかった。
付き合っている時は、彼女のアパートへ行くと料理を作って食べさせてくれたものだ。
『釣った魚に餌はいらない』
とは、男のセリフとは限らないらしい。

そんな毎日が数ヶ月続いた。
さすがに僕も、限界に来ていた。
その晩はいつにも増して激しい口論となった。
その瞬間。
例の発作が襲ってきた。
激しい動悸。めまい。頭の後ろを闇へと引っ張られるかのごとくの恐怖。
僕は、とっさに言った。
「ちょっと、待って！」
「パニックが・・・」
「助けて・・・」

紀子は凍り付くような冷たい目で僕を見下ろしながら言った。
「そういう時ばっか！ずるい！」
そう吐き捨て外へ出て行ってしまった。

「タ・ス・ケ・テ・・・」

この日を境に、彼女は他の男と不倫し、僕の目の前にはほとんど姿を現さなくなった。

『だから、言ったんだ』

『希望なんて持つなって』

流浪

いつからだろう？
どうしてだろう？
愛に代償を求めるようになったのは・・・

ため息をつくたび、心が萎んでいく。
そう分かっていても、ため息をつかずにはいられなかった。
毎日が無意味で、生きている意味さえ見いだせない。
自分の帰る場所はなく、毎晩街をさまよい歩いた。
肩を抱き合い、寄り添い歩く恋人たち。
仲間同士で大声を出してはしゃぐ若者たち。
そんな風景の中、僕は一人泥酔しぼろぼろになって街角に寝転んでいた。
空を見上げても、星一つ見えない。

僕は悲劇のヒーローを気取っていたのかも知れない。
そんな風に思い始めていた。
愛ばかりを求め、僕は何をしてきたのだろう　と。
愛せば、愛されるのが当然の権利だと考えていたのかもしれない。
子供は親を選べない。
だが、子供は実に純粋に親を愛する。
その代償を求めることなく。
誰に教えられた訳でもないのに。
人間は、知能の代償として動物本来の『愛』を失ってしまったのだろうか？

年を重ねるごと、『愛』は『愛』でなくなる。
また、考えてもどうにもならないことを考えていた。
今更、過去には戻れないのだから。
かといって、今から何をすればいいのか？
僕には見えていなかった。

会社勤めにも愛想がつき、当時の先輩から誘われ会社をおこすことにした。
ちょうど良いタイミングだった。
心の隙間を少しでも埋めたいという一心で会社を始めた。
技術者であった僕には、経理や経営のノウハウは全くなく、
一から勉強しなければならなかったのも幸いした。
勉強している時間というのは、実に都合が良い。
自分の知識を増やす事も出来れば、同時に虚しさを忘れる事も出来る。

初めてにしては上出来だった。
会社は順調に売り上げを伸ばし、数ヶ月で従業員を雇えるにまでなった。
昼は営業として歩き回り、夜は経営状況の分析と、寝る暇もなくなっていた。

それでも、『パニック発作』は変わらず突然襲ってきていた。
あるときは、高速道路を運転中。あるときは、顧客との打ち合わせ中。
まだ認識が薄かった『パニック障害』を説明するのは困難で、理解してもらうことも困難だった。
この『パニック障害』と付き合い始めてもう１０年になろうとしていた。

このころの僕は、『早く死にたい』と毎日願っていた。
自殺などする勇気もなく、病気か事故で突然の死が訪れることを望んでいた。
そして、この思いをさらに加速させる出来事が待っていた。
先輩の裏切り。
また、人に騙される結果となった。
彼は帳簿をごまかし、いかにも赤字であることを理由に僕の給料をカットしてきた。
役員である僕は、当然の責任と感じ、受け入れていたのだが。
現実は全くの嘘であった。
単純に自分の取り分を増やしたいがための、でっち上げだった。
僕は落胆する事に慣れきっていた。
なんの精神的ダメージも受けてはいないと思っていた。
しかし、確実に『死』への願望は強くなっていた。

僕は、独立し、自分一人で仕事を始めることにした。
その頃からだ。パソコンに没頭しはじめたのは。
まだ、ＩＳＤＮが出始めの頃。
インターネットも今のように動画中心ではなく、静止画像が精一杯の時代だ。
自分の会社のホームページを運営する傍ら、趣味で自作パソコンのホームページも運営していた。
顔も年も性別も分からない人たちとの会話に、心の安らぐ場を見いだしていた。

このことが、僕の最後の『愛』への一歩だったとは、その時の僕には想像も出来なかった。

そして、僕の輪廻が始まる。

再会

いつまでも忘れられなかった
どうしても忘れられなかった
常に頭の片隅に彼女がいた

あの頃の僕は、ネットという仮想空間にまだ可能性を信じていた。
仮想空間とはいえ、所詮人間同士のコミュニケーションの場所に変わりない。
そう信じていた。
だから、ネットを通じて知り合った仲間と思えた人たちと心から解り合えていた気がしていた。
現実社会からの逃避行動だったのかもしれない。
けれど、僕には居場所がなかった。
唯一、存在を見いだせる場所だったのだ。

ある日の事だった。
その日も、夜になって自分の掲示板で常連の仲間たちと、半ばチャットのような勢いで掲示板を
埋めていった。
僕はなにげなしに書き込んだ。
『どこかに、可愛い女の子いないかなあ。最近、虚しいんだ』
すると、一人の仲間からｒｅｓが届いた。
『根無し草さんのお住まいの近くに、紹介出来る子がいますよ』
根無し草とは僕のＨＮだ。
『マジで？』

『本当ですよ。まだ若いけど面白い子ですよ』
僕は冗談交じりに書き込んだ。
『じゃあ、彼女に僕のメアド教えておいて！連絡待っているよって！（笑）』
もともと冗談の好きな連中の集まりなので、いつもこんな調子のやりとりだった。
だから、その日のやりとりも、僕は気にも止めてはいなかった。

『じゃあ、そろそろ今日はこの辺で』

くだらない話かもしれないが、そんな馬鹿を言っている時間が嬉しかった。
僕の話に付き合ってくれる仲間にも感謝していた。

翌日の夕方だった。
一通のメールが届いた。
なんと、マジだった。
『昨日、紹介されましたアズミと言います。オヤジ好きです。（笑）
よかったら、一度お食事でも
どうですか？』
正直、驚いた。
いや、本当に女の子からか？
実は、ダミーの男がからかってメールしてきただけかも？
僕は、半信半疑だったが、乗ってみるのも悪くはないと思っていた。
『いいよ。じゃあ、今度の休みに公園前駅の駐車場。車で待っているよ！』
４０を過ぎたいいオヤジが・・・と自分でも笑ってしまうが、
こんなジョークも悪くはない。
久しぶりに現実社会で楽しいひとときを過ごせたら・・・

その程度の思いだった。

今思うと、これも自虐的な行為の一貫だったのかもしれない。
この事が、逆に嘘や騙しである事をどこかで期待していたのかもしれなかった。
この頃の僕は、未だ死への願望が根強くあったから。

数日後、待ち合わせの場所へ向かった。
駅前の駐車場に車を止めると、外へでてタバコを吸いながらあたりを見回していた。
携帯のメールが鳴った。
『いま、駅前駐車場の方へ歩いてます。全身黒ずくめのカラスちゃんです』
ふと、携帯から顔を上げると黒いミニスカートと黒のTシャツの女の子が歩いていた。
僕はゆっくり彼女に歩み寄り声をかけた。
「アズミちゃん？」
おもむろに顔をあげた、その子を見て全身に鳥肌が立った。

『千鶴！！！』

あの頃の千鶴にうり二つの子がそこにいた。

「こんにちは！初めまして。アズミです」

回想

愛されるってどんな感じですか？
愛するのとは違いますか？
それは幸せなことですか？

我が目を疑うとはまさにこのことだ。
『何故！？』
因果と呼ぶべきなのか？輪廻と呼ぶべきなのか？
僕は、ただただ、唖然としていた。
そして、次の瞬間、僕はあの千鶴と共にいた日々の中にいた。

千鶴は2学年下だったため、僕が大学3年になって東京へ出てきた。
渋谷での一件以来、僕は本気で彼女だけを愛していた。
本格的に付き合っていると呼べたのは、その頃からだろう。
僕のアパートは浦和にあり、彼女は女子大の寮生活だった。
だから会えるのは週末のみ。
携帯もない時代だ。
声を聞くのもままならない時代だった。
どこが好きだったのだろう？
あの頃の僕は、そんな自問をすることさえ無いくらいに彼女に夢中だった。
なにもかも。
存在そのものが、愛おしかった。
彼女が東京に出てきてから、初めて僕のアパートに遊びに来ること

になった。
僕の誕生日を祝ってくれるということだった。
駅まで迎えに行くと、彼女は満面の笑みで電車から降りてきた。
「時間かかった？」
僕はそう聞くと、
「うん！結構遠いよ！」
彼女は素直な感想を言った。
二人、顔を見合わせて思わず吹き出した。
アパートに着くと、暫く高校時代の話で盛り上がった。
彼女の親友の話。
同じ部活の仲間たちの話。
取るに足らない話ばかりだったが、心が弾んでいた。
僕は改めて彼女に言った。
「待っていたよ」
彼女は嬉しそうに、
「うん。私も」

それから、毎週、彼女が週末に僕のアパートに来るようになり、
僕は幸せの絶頂のなかにいた。
もっとも、この時の僕はそれを絶頂と知るよしもなかったのだけれど。
二人が深い関係になるのに、そう時間はかからなかった。
彼女も嘘をついて女子大の寮に外泊許可をもらい、僕のアパートに泊まったりもしてくれた。
幸せだった。
愛する子が隣にいてくれる時間。
泊まった次の日の一人の夜は、寂しくて、胸が苦しくなった。
会いたい。
『歩いて、会いに行こうか？』
終電も終わった時間に、そんな無茶苦茶な事まで本気で考えもした。

もちろん、二人で旅行にも行った。
数え切れないくらいの場所へ行った。
喧嘩もした。
でも、必ず仲直りが出来た。
僕は大学４年、彼女も短大なので卒業の年を迎えると、
本気で彼女との事を決意していた。
『プロポーズしよう！』
『彼女にずっと、そばにいて欲しい』
そう思い始めていた。

その頃からだったのだろうか？
あるとき、彼女の生理が極端に遅れたことがあった。
彼女は毎日泣いていた。
僕は責任を取る覚悟は出来ていたし、むしろ嬉しささえあった。

でも・・・

彼女は、順序と規律を優先した。
もし、妊娠したら、『堕ろす』と。

僕は、絶望した。
『またか！？』
僕の子供を産みたいと無条件で願ってもらえない。
この時は僕はまだ気づいていなかったんだ。
女性の心理を。
いや、今でも気づいていないのかも知れない。
だから、こんなに苦しいんだ。
『好きであること』『愛していること』『結婚すること』
すべて別の次元に存在していたんだ。

そして運命の日がやってくるんだ。
あの１０月２４日が・・・

欲望

真実の愛

偽りの愛

いずれの愛も必ず終わる

呆然と立ち尽くす僕を見て、アズミは言った。

「車、乗せてもらってもいい？」

僕は我に返り、

「ああ、ごめんね。どうぞ！」

と言って、助手席のドアを開けた。

「初めまして！いきなりホテルも何だから、喫茶店でも行こうか？」

僕はちょっと思い切ったジョークを言ってみた。

彼女は満面の笑みを浮かべて、言った。

「オマエ　サイテイ！」

二人は顔を見合わせて笑った。

移動する車の中で、下品とも思えるジョークを僕は何度も言った。

その度、彼女はそれをうまくかわす受け答えをしてきた。

『この子は頭の回転が早い』

僕はそう感じていた。

「ところで、アズミちゃんはいくつなの？」

「２４だよ」

『僕のちょうど半分か』

『いや、僕のあの忌まわしい思い出の年に生まれた子なんだ』

そう思うと、なにやら運命的な何かを感じ始めていた。

「こんなおじさんとデートして楽しい？」

単純な疑問だ。

最近はやりの援助交際が目的なのかもしれない。

そう考える自分はやはりゲスなオヤジになっていたんだ。

彼女は、ふっと暗い目をしたかと思うとすぐに笑顔で言った。

「だって、若い子ってガキでつまらないんだもん」

僕は、彼女の答えよりも、ふと見せた暗い眼差しに『どきっ』とした。

『彼女は何か、重い物を背負っている』

直感でそう感じた。

「お腹すいたぁ～」

「じゃあ、アズミちゃんのよく行く店に連れて行ってよ！」

着いた店は気さくなイタリアンレストランだった。

頼んだ料理はとても美味しくて正直びっくりした。

「おいしいでしょ～？」
「ここは、なんでもおいしいんだよ！」
最近の若い子らしく、洒落た店を知っているものだ。
しかも、値段もリーズナブルだ。
僕は食に関しても関心が無くなっていた事もあり衝撃的であった。
「びっくりした？」
先ほどの暗い目とは正反対の、まるで子供のような無邪気な
明るい目を輝かせて彼女は言った。
それがさらに彼女のミステリアスな暗い影をさらに気にさせた。
食事も終わり、僕は思い切って冗談交じりに言ってみた。
「ホテルいこっか？」
彼女はまた暗い目を見せたかと思うと次の瞬間、こう言った。
「いいよ・・・」
『やっぱり、最近の軽いノリでＳＥＸしちゃう子なんだ』
そう思うと怒りにもにた感情がわき上がってきて、僕は躊躇することなくホテルに入った。
そうして彼女を駅まで送り、別れた。

二度と会うこともないだろうと。

その時はお互いに、そう思っていたんだ。

無言

人は自分しか愛せないのだろうか？
誰かのために生きるのが愛なのだろうか？
誰かのために死ぬことが愛なのだろうか？

『ゲス女め！』

あの日以来、アズミの事を思い出しては心の中で呟いていた。
いや、ゲス野郎と自分を罵りたかったのかも知れない。
訳も分からず必要以上にイライラしている自分がいた。
不思議な感覚だった。
アズミへの嫌悪の感情とはうらはらに、彼女が気になっていた。

あれから一週間ほどたったある日の夜中のことだ。

携帯にメールが入った。

アズミからだった。

『帰れなくなっちゃった。どうしよう。困ったよ～』

何の事やらさっぱりだ。
しかたなく返信する。
正確には少し嬉しかったのだ。

『何があったの？』

『変な奴について行ったら、途中で車から降ろされて・・・』
『電車もないから、家に帰れなくなっちゃった・・・』
『あと、お腹が凄く痛いの』

『何処にいる？』

『前に会った駅の３つ先』

『待ってろ！』

何故か、彼女を迎えに行き家まで送るはめになった。
『しょうがなく』ではなかった。
反射的というべきだろうか。
『行かなくては』
と体が自然に反応していた。

彼女のいる駅まではおよそ１時間。
車を飛ばした。
教えられた場所につくと、彼女は暗闇に小さくなってうずくまっていた。
まるで、雨に濡れた野良猫のように。

「馬鹿野郎！何してんだ！」

僕がそう言うと、アズミは僕に駆け寄り抱きついて泣き出した。
僕は、暫く彼女を抱きしめていた。

「馬鹿野郎・・・」

少し落ち着いたところで、彼女を車に乗せ彼女の家へ向かった。
とは言え、僕は彼女の家を知らない。
彼女はお腹が痛いらしく、苦痛で顔を歪めている。

「少し横になりたいの」

彼女はか細い声で言った。

「じゃあ、ホテルで少し休むか？」

「うん」

僕は近くのラブホテルに入り、彼女をベッドに寝かせた。

「落ち着くまで眠ったら？」

そう言うと僕はソファーで横になった。

・・・・・・・・・・・・・・・

「どうして？」

「それはこっちのセリフだろ？」

彼女がいきなり言った。

僕はすかさず言い返した。

アズミは淡々としゃべり始めた。

「確かに、この前はサイテイ野郎だと思ったよ」
「でも、不思議なんだ」
「なぜか、あなたのことが気になったの」
「今日も、気がついたら、あなたにメールしていた」

僕はゆっくりと話した。

「俺もそうなんだ」
「何故か、俺と同じにおいがしたんだ」
「だから・・・」

僕とアズミは互いの顔を見て『ぷっ』と吹き出した。

「似たもの同士なんだね」

二人はホテルを出ると、彼女のナビで家までの時間、ずっと無言だった。
決して会話が無かった訳じゃあないんだ。
無言で会話していたんだ。
あの時の二人は。

純愛

出逢いとは何ですか
愛しさとは何ですか
儚さとはなんですか

アズミは心に闇を抱えていた。
それは、僕の直感通りであった。
ただ、僕の想像を超えるものではあったのだが。

彼女は高校時代・大学時代と普通の女の子のように
恋をしてきたという。
だが、いずれの恋も短命に終わった。
理由は『彼』のＤＶだった。
付き合った彼はみな嫉妬深く、異様なまでに彼女を束縛した。
時には、いわれもない理由で顔を激しく殴られた。
それでも彼女は『彼』を好きだったという。

そんなある日、彼女は車で事故にあった。
出会い頭の衝突事故だ。
彼女はきき腕を複雑骨折し、相手の男性は無傷だったという。
そんな状況の中、彼女の母親は相手の男性の将来を心配したという。
娘の身体より、優先して・・・
まるで、僕がパニック障害で母から見放された時のように。
彼女はこれをきっかけに、母の事も信じられなくなったらしい。

そうして、彼女の精神は崩壊していった。

『鬱病』

それから心のバランスを失った彼女は、自暴自棄になり、
体を売るようになったという。
誰も信じることが出来なくなった。

男は『肉体』だけ与えれば、喜ぶものだと思うようになった。
世の中の人間はみんな死んでしまえば良い。
そう思うようになったという。

僕は溢れ出る涙を拭うこともせず、彼女の話を聞いた。

そして、僕の話も、

彼女も涙を拭うこともせず、聞いてくれた。

パニック障害の発病から２４年経った今、こうして互いに似たような
境遇を抱え、苦しみ、悩んでいる、２人が出逢った。
単なる傷の舐め合いなのかも知れない。
いや、同じ体験をしてきた者にしか分からない共有物があるからこ
そ、
相手を思いやれるのかもしれない。
だって、人は自分が一番大切なのだから。

だから、僕はこの時、心に誓ったんだ。

『彼女を暗闇から、明るい場所へと導いてあげよう』

いや、正確には2人で明るい場所に戻りたい・・・

それが本音だったんだ。

僕は自分のかかりつけの病院に彼女を連れて行ったり、
メンタルケアに評判の病院を聞きつけては、彼女を連れて行った。
彼女の鬱病は重度で、思うように回復へとは向かわなかった。
同時に僕のパニックも相変わらず時と場所を選んではくれなかった。

「なんで、わたしばかり、こんな目に遭わなきゃならないの？」
「もう、死にたい！」
突然泣き叫ぶアズミを、僕は抱きしめることしかできなかったんだ。

週に2回は逢うようになり、ホテルで過ごした。
お互いに精神的に『人混み』に耐えることが出来なかった。
ホテルでは睡眠を取っていた。
2人とも薬の副作用で、異様なまでに睡魔に襲われていたから。

「私って、生きていても、意味ないのかもしれない・・・」
「だって、私、醜いもの・・・」
自分の存在を疑い始めた彼女に、僕は言った。

「今までのアズミも、今のアズミも。そしてこれからのアズミも、何も間違っていないよ」

彼女は大粒の涙を目にためて、僕を見つめていた。
そしてその夜、彼女からメールが届いた。

『ありがとう！あなたの一言に全てが救われた気がしたよ！』
『あなたと出逢うために、生まれてきたんだとさえ思えるよ』

気がつくと彼女と付き合い始めて1年が経っていた。

僕も彼女も、病状は一進一退だった。

唯一変わっていったのは、アズミが僕に好意を抱き始めてくれた事だった。
いや、『好意』ではなく、あれこそが僕の求めていた『愛』だった。

「私ね、あなたの赤ちゃんが欲しい・・・」

アズミは突然言い出した。

嬉しかった。生まれて初めて僕の子供を欲しがる子が目の前にいる。
ただ・・・
『２４』の年齢差は大きな壁だった。
僕が死んだ後、彼女は２４年間思い出と過ごさなければならない。
愛おしい彼女にそんな苦悩を押しつける事は出来ない。

僕の考えを見透かしたように彼女は言った。

「私、平気だよ！」

「だって、あなたのＤＮＡとずっと生きていけるんだもん」

僕は確かに、今、暗闇から抜け出した。

葛藤

何かを得ると
代わりに何かを失う
その繰り返し

ある日の事だった。
実家の母から連絡があり、父が腰痛で苦しんでいるという。
昔から、病気に臆病だった父の事なので、
大したことではないだろうと思いはしたが、高齢ということもあり
これも親孝行と考え、父を病院に精密検査に連れて行くことにした。

検査後、僕は担当医に呼ばれ病室へと入った。

「胆管のあたりに、大きな影が見受けられます」
「悪性の可能性が高いので、専門の病院で見て頂いた方が・・・」

担当医は淡々と語った。
ただでさえ、気の弱い父だ。
動揺は隠せなかった。
僕は父に心配ないからと声をかけ、担当医の紹介状を受け取り病院を後にした。

帰りの車の中、父は一言もしゃべらず、俯いたままだった。

それから数日後、専門の病院で再検査を受けるべく、
車で一時間ほどの病院へと向かった。
兄に話をしておいたため、兄も同席していた。
もちろん、母もである。

検査はほぼ一日かかった。

病室に僕と父、兄の三人が呼ばれた。

「はっきり申し上げます」

「胆管ガンです。しかも、ステージ４に入っています」

目の前が真っ暗になった。
いくら医学の知識のない僕でも、ステージ４の意味くらい理解できた。

『末期』

担当医は続けた。

「延命処置はなさいますか？」

死の宣告だ。
兄は冷静だった。

「このまま行ったら、どの位・・・」

耳を塞ぎたくなった。
いや、父が一番辛いのだ。

僕は受け止める義務がある。

「早ければ、三ヶ月くらいでしょう」

父も兄も気丈だった。

「では、こちらで判断させて頂きます」
兄はそう言うと、父の肩をかかえ立ち上がった。
かたや僕は、足が震えて立てなかった。
信じられない。今こうしてこんなに元気な父が・・・

帰りの車の中、母は泣き崩れ、会話をする事さえ出来なくなっていた。

父がぽつりと呟いた。
「苦しんで死ぬのは嫌だ。楽に死なせてくれ」

兄が言った。
「わかった。わかったから」

その日から、父の闘病生活が始まった。
と同時に、アズミと逢う時間もどんどん失ってしまった。

ドラマなどではよくある台詞にこんなものがあった。
『私と仕事のどっちが大事なの？』
答えは決まって
『比較できないよ』

実は、男の逃げなんだ。

僕はこの時、そう思った。
どこかで、どちらかを優先している。
女性にそれを許す寛容さを強要しているんだ。

こうして父の癌と向き合っていた頃、アズミは一人鬱病と向き合っていた。
僕は、彼女を救った勇者気取りだったんだ。
度々メールで『逢いたい』と告げられ、
その要求にも十分に答えてあげることが出来なかった。
逆に、僕はたまに逢えば、僕の苦悩を一方的に話すばかり。

それが、僕自身をさらに苦しめる事になるなんて、
想像すら出来なかったんだ。

悲愴

僕はどうして

こんなにも

無知なんだろう

父の闘病生活から、ちょうど半年が過ぎた。

父は、本人の希望通り、モルヒネが効いた状態で
まさに眠るように永眠した。

僕の唯一、尊敬した人がこの世からいなくなった瞬間。

『父さん、僕は結局、あなたを超えることが出来ませんでした』

『父さん、・・・　本当にごめんなさい・・・』

安らかな寝顔の父の前で、僕はそう呟くことしか出来なかった。

一方で、この頃のアズミは、既に僕から気持ちが離れていっていた。

たった一人、半年もの間、病気と孤独に耐えろというのは、無茶な

話だ。
彼女は、その半年の間に告白された男性と付き合おうと思っている
そう僕に打ち明けてくれた。
僕は素直に受け入れる事は出来なかった。
『相変わらず、なんて自分勝手なんだろう』
僕は自分を責めながらも、アズミとの別れを拒んだ。
一方で、２４才という年の差から彼女の本当の幸せは
僕との間には無いとの思いもあった。
彼女は十分に僕に与えてくれた。
そう、失われた僕の２４年間を埋め尽くすものを。
これ以上、求めるのは『愛』では無い。
頭では理解しても、心は理解出来ていなかった。
そして、僕は彼女に言ったんだ。
「必ず、必ず幸せになると約束して！」
「もし、苦しくなったら、初めて会った場所で待っていて！」
「必ず、迎えに行くから」
アズミは泣きながら、深く頷いた。
それが、アズミを見た最後だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三ヶ月ほどが過ぎたある日、携帯が鳴った。

アズミの両親からだった。

「ごめんなさい。いきなり」

「アズミは自殺しました・・・」

「アズミの日記にあなたの名前が・・・」

『ドクン』
心臓が大きな鼓動を刻んだ。
声が出ない。
自分の身体が自分の物ではないような感覚。

僕は、電話の向こうの声に
『はい』『はい』
と答えることしか出来なかった。

アズミは最後まで『鬱病』に悩まされていたという。
奇異な行動も、しばしば起こしていたらしい。

やり場のない怒り。
当然だ。

自分への嫌悪からくる怒りなのだから。
僕は、ただ、ただ、気が狂ったように奇声を発し続けた。
実際に正気ではなかった。
来る日も、来る日も・・・
僕は大切な人を、また失ってしまった。
誰のせいでもない。
『僕のせいだ』
彼女は、僕の失ってしまった２４年間を埋めてくれた。
何よりも、愛おしかった。
諦めていた『愛』を信じさせてくれた。
なのに・・・
何故、僕は彼女の手を離してしまったんだろう。
『彼女の幸せ』
そういう言葉で、逃げていたのかもしれない。
いや、『怖かった』
また、裏切られるのではないかという恐怖心。
最後まで僕は『愛』から逃げていたんだ。
それから、僕はアズミと初めて会った駅の前に行った。
毎日

毎日

いくら待っても、彼女は現れなかった・・・

そう、アズミは僕の暗闇から生まれ、
僕の暗闇が消えると、死んでいったんだ。

その役目を終えたかのように・・・

決別

夢を見ていたのだろうか
２４年間もの長い間
それとも一瞬の出来事だったのだろうか

アズミがいなくなってからの僕は
一層、パニック障害の症状が酷くなっていた。
それでも、生きようとしていた。

一方で、母は父を失って心のバランスを完全に失っていた。
事あるごとに、自分の苦しみを僕には理解出来ないと罵倒した。

そんなある日、いつものように母は僕に行き場のない悲しみを
ぶつけてきた。

当然、僕にとってもこの世で一番の存在であった父の死は
たやすく乗り越えられるものではなかった。

「あんたは、お母さんの苦しみなんかちっとも理解できないんだよ」
「私は、あんたなんかよりずっと長くお父さんと一緒だったんだから」
「わからないでしょ？」

僕は絶句した。
同時に、何故かくすくすと笑ってしまった。
「何がおかしいの？頭おかしいんじゃないの？」
母の罵倒は続いた。
確かに、僕は頭がおかしいのだ。
でなければ、大切な人を2人も失うことなど無いはずだから。
「こんな事なら、あんたなんか生むんじゃなかった・・・」
その通りだと思った。
と同時にそんな母の姿が、自分の姿と重なった。
あの時の僕は、バランスを失うというより、
タイトロープから落ちている最中だったんだ。
真っ逆さまに・・・
それからの僕は、毎日毎日、
アズミとの思い出の場所を彷徨い歩いていた。

「助けて！」

「アズミ！アズミ！アズミ！・・・・・」

泣きながら・・・

迷子の子供のように

泣きじゃくりながら・・・

誕生

すべてのものに始まりがあり
終わりがある
その繰り返しの一部でしかなかった

長い、長い、眠りから目が覚めた。
彼女は？

絞め殺してしまった彼女・・・

僕はあたりを見回した。
どうやら、そこは病院の一室だった。

『夢？』

そうだ。
僕は、歩き疲れ、パニック発作に襲われ倒れたんだ。

『彼女は・・・いったい・・・』

あの夢はなんだったんだろう？
おぼろげながらに、感じていた。

『夢なんかじゃない！』
『実際に、僕は同じ事をしたんだ』

僕は僕を救うために、自分の手で救世主を葬ってしまった。

僕が『僕』であり続ける事と、

彼女が『彼女』であり続ける事が真実と信じていたばかりに。

高校時代から、愛やＳＥＸにどこかで冷めていた。

きっと、怯えていたんだ。

裏切られる事への恐怖・・・

真実を知る事への恐怖・・・

そして

『アイデンティティ』の覚醒に・・・

そんな僕に、アズミは教えてくれた。

『愛』の意味を。

『ＳＥＸ』の意味を。

『生きる』という意味を。

自分自身より優先すべき人格との出逢い。

自分のＤＮＡを残すことを望んでくれるパートナーとの出逢い。

こんな年になるまで解らなかったよ。

『遅すぎた・・・何もかも・・・』

病院を抜け出すと、僕はある場所に向かった。

僕の大好きだった彼女と過ごした街。

そんな街が一望できる小高い山。

僕は、中腹まで車で移動し、そこからさらに上まで歩いて登った。

あたりは真っ暗で、遙か眼下に僕たちの街の灯りが美しく輝いていた。

「綺麗だ」

「また見られるといいな」

『ドクン』

また、パニック障害の発作だ。

ただ、もう僕には薬は必要ない。

だって・・・

暫く発作に苦しみ喘いだ後、僕は山の頂近くにある送電線の鉄塔に向かった。

僕は、鉄塔の柵を越え、一段目の柱に縄を架けた。

そして、おもむろに首を通し、一気に宙へと飛び出した。

僕の『生』を望んでくれる胎内へ向かって。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

気がつくと、見慣れた景色が目の前に広がっていた。

彼女と待ち合わせた、駅前だ。

ふと見ると、全身黒ずくめの服装の女性がたった1人、ぽつんとたたずんでいた。

僕は彼女に歩み寄り、

「ごめんね。待った？」

と囁いた。

彼女は、呟くように、優しく、包み込むような声で言った。

「待ってたの。ずっと。ずっと・・・」

終

誕生（後書き）

長い間読み続けて下さった方々にお礼を申し上げたいと思います。
私は、文才もなく、小説家を目指しているわけでもありません。
だから自分の思った通りの人物を自分なりに描いてみたかったんです。

『僕』の人生は幸せだったのでしょうか？不幸だったのでしょうか？
私にもわかりません。

ただ読んで頂いて『僕』に対して何らかの感情を持って頂けたら、
それだけで幸せだと思っています。

またの機会にお目にかかれますよう・・・

ありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5854j/

24×2

2010年11月7日19時17分発行